
笑顔が見たくて

Granxie(エドワード)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑顔が見たくて

【Nコード】

N6954T

【作者名】

エドワード
Granxie

【あらすじ】

ドタバタ学園生活！？

笑顔溢れる学園だけど、一人だけ無表情のあいつ
あいつを笑わせる為に俺達は罠を仕掛ける！！

（前書き）

設定

主人公

久我くが 雅紀まさき

16才

バカで有名な程で毎度、変な事を思いつく体力バカ
スポーツが得意でよく助っ人をしている
スポーツの才児と言われる事もあり小さい時から色々と目を付けられて
いる

学園の天才児と呼ばれる間崎 裕哉の幼馴染

雄哉が学園長の息子と知っていながらそれを気にしない

「学校は楽しむもの」が口癖

峰原みねはら 雄介ゆうすけ

15才

雅紀とは中学からの親友で悪友

バカな雅紀が面白いと言う事でつるむ

ターゲットの間崎 裕哉が笑う所が見たくて雅紀に協力する

悪戯の天才と呼ばれる悪ガキ

財閥の御曹司でターゲットの間崎 裕哉に次いで頭がいい

ターゲット

間崎まざき 裕哉ゆうや

16才

天才と呼ばれた才児

体力バカで有名な久我 雅紀の幼馴染

間崎は母方の苗字で父方の苗字は綾西

綾西学園、学園長の息子と言う肩書きを嫌い結果的に笑わなくなる

「昔と違って笑わない」と言う事で狙われる事になる

裕哉「放っておいてくれないか？」

その一言だけ言い放ち無表情で俺達から離れ去っていく
こいつは俺がこの学園で笑わせたい唯一のターゲット・・・

『間崎 裕哉』

天才と呼ばれるこいつは俺の幼馴染

そして、俺達が通う学園・・・

綾西学園、学園長の息子

笑わないこいつを俺は笑わせたい

昔のように・・・

それが俺、久我 雅紀の楽しみであり幼馴染としての願い

綾西学園高等部1年A組教室

雅紀「あゝあ、またダメだったな」

俺は机にへばり付くようにして前の席に話しかける

雄介「なんで笑わないんだろうな？」

雄介は後ろを向いて俺に問いかける

『峰原 雄介』

俺とは中学からの親友で悪友

裕哉の笑う顔が見たいと言う理由で俺と罫を仕掛けている

財閥の御曹司らしいが俺からすれば悪戯の天才でしかない

雅紀「なあ、もっと笑いのツボに効くイタズラとか無いのか？」

雄介の悪戯は普通の奴なら即効で効く程の凝った悪戯

それでも裕哉は笑わない

俺達が裕哉に悪戯を始めてから半年は経過している

それでもあいつはポーカーフェイスで笑っているとは思えない

雄介「こつちが聞いているのに逆に聞くなよ・・・」

呆れ顔の雄介

いつもの事だけど話が噛み合わない事もある

雄介「まあ色々やったけどあいつは自分から人を避けてる感じだよな」

そして、こいつの観察力は時に怖いものを感じる
全て見透かされていると言う錯覚さえ覚えるほど

雅紀「・・・学校は楽しむものなんだけどな」

独り言のように言ったが避けていると言う言葉で俺は思い当たる事があった

あいつ・・・裕哉は自分の立場から人を拒絶している

俺の目の前であいつの親が言ったあの言葉が急激に頭を駆ける

雄介「おいおい、急に暗い顔すんなよ・・・お前らしくないぞ」

雄介の言葉でハツとする

こんな事で暗い顔してたらあいつは笑わせられない・・・

雅紀「悪い——、つと次は・・・体育——！」

壁に貼つてある時間割を見て俺は急いで更衣室に向かう

雄介「あ——、次はあの体力バカの好きな体育だったか・・・」

苦笑いで俺は雅紀を・・・

苦し紛れで逃げたあのバカを追う

雄介「（お人好しだよな・・・俺も雅紀も——）」

綾西学園校庭・高等部4時間目体育

雅紀「今日の体育は何やるんだろっとな？」

俺は無理にいつも通り振舞う

雄介「さあな、まあ・・・1年全クラス合同っばいから、体力測定だとかだろ？」

雄介は辺りを見ながら様子を伺っている

先生「今日は高等部1年全クラス合同で体力測定をする——」

先生達が出てきての一言

だけど体力測定とは名目だけに過ぎないだろう・・・

何故なら校庭には学生が使うようなものではない体力測定機器が多

くならんでいる

雄介「あんなに見た事無いぞ・・・」

雄介は驚き戸惑っている

裕哉「あれはこの学園だけで実施されている特別な測定機器類さ・・・」

・
」

横から裕哉が口を出してきた

表情は相変わらずのポーカーフェイス

雅紀「あ・・・そう言えば入る前に聞いたような・・・」

入学前に聞いたような事を裕哉の話で思い出す

雄介「俺は聞いてないぞ?!」

慌てる雄介

その勢いは先生に何かするでは無いかと思うほど大きい

裕哉「君は多分スポーツで推薦されてるわけじゃないだろうから――」

――

無表情での嫌味

昔はこんな事言う奴じゃなかったのに・・・

俺はそこまであの言葉がこいつを変えたのかと思うと怒りで拳を強く握っていた

く握っていた

雄介「・・・まあ聞いてないのはいいとして・・・測定って毎年なのか?」

のか?」

雄介が裕哉に聞く

裕哉「僕達、学問推薦で入ってる人間は1年の時と3年の時だけ・・・」

・だったはず」

雄介に向く事無く答える裕哉

直後に裕哉が呼ばれた

雄介「――って事はお前は毎年って事か・・・」

そんな事を言いながら雄介は俺の肩を叩く

雅紀「なんで残念そうな顔するんだよ・・・」

雄介の手を振り払う事も無くそのままの状態でいると

雄介が呼ばれて裕哉が戻ってきた

雅紀「やっぱりカーフェイスなんだな、裕哉。やっぱり——」
戻ってきた裕哉に対して過去の話を出そうとすると殴られた
裕哉「もう・・・過去の話は出さないでくれなにか・・・」

顔を伏せ怒りを抑える裕哉

それはカーフェイスの仮面の見えたあいつの本音なのかも知れない

雅紀「お前が昔みたいに笑うまで俺は諦めないからな!!」

その一言を言うと俺は裕哉から離れ呼ばれるのを待った

屋上・昼休み

体育の体力測定後、購買部で弁当を買った俺と雄介は屋上の片隅に
居た

いつもここで作戦を練っている

雅紀「で、裕哉を——。・・・つてえ・・・」

今になって殴られた痛みが出てきた

俺は殴られた頬を押さえながらも購買部で買った弁当を食べる

雄介「——。にしても、あの天才が感情的に殴るって珍しいな」

横で笑う雄介

それでも目は真剣に作戦を考えてる事を示している

雅紀「珍しいどころか初めてだろうな・・・」

俺は空を見上げながら一瞬だけ本音を見せた裕哉の顔を思い出し
ていた

何かを拒絶する事でしかあいつは耐えられないほど我慢しているあの顔を——

雄介「天才が笑った顔を見ているのはお前だけだろ?」

俺は物思いに耽って空を見ている雅紀に聞く

急激に話しかけられて鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする雅紀

雅紀「あ、ああ・・・昔は小さい事でも笑っていたな」

昔と言う言葉を言う度に雅紀は暗い顔をする

その雅紀は天才が笑わない理由を知っている

俺はそれを聞いた事はない、聞く必要も無い
多分、俺と同じで親が原因だろうから――

雄介「やっぱ正攻法のイタズラじゃダメか・・・」

俺は考える

今まで「くすぐる」だとか「雅紀の髪型を可笑しくしたり」と試してはいる

それがまったく通じないとなると・・・

雅紀「やっぱ、くだらない事で笑わせたいよな・・・」

雄介「やっぱり、くだらないくらい可笑しいと思える事でじゃないと笑わないよな・・・」

俺達はハモるように独り言を言って驚く

互いに同じ事を考えていた

雄介「となると」

雅紀「やる事は一つ！」

俺達は互いに頷く

罨の準備を始めようとした時チャイムが鳴った

それを無視してまで準備をする

学園を抜け出し裕哉が一人で住む近くの家の入り口に行く、仕掛けるのは落とし穴

子供じみた事だけど確実に笑わせるならば仕掛ける側もかかるような罨の方がいい

そして、遊びに行くと言う名目で一緒に引っかかれば・・・

実際にはうまく行くとは思っていない

それでも、俺達はそういうくだらない事しか思いつかない

夕方、小雨が降ってきた

泥まみれになりながらも穴を掘っていた

???「何・・・やってるんです――」

後ろからの声、振り向くと裕哉だった

しかも、顔は無表情でも声は怒っている

雄介「あゝ・・・その・・・」

雅紀「えっと・・・何て言うか・・・」

俺達はスコップを後ろに隠して言い訳を考える

裕哉「また・・・悪戯でもしようと思っていたんでしょうけど・・・」

「

顔に変化は無い

それでも、声は呆れているのが伝わってくる

雅紀「あゝもう!!」

俺は勢いのままに裕哉を穴に引きずり込む

裕哉「ちよっ・・・!!」

なす術も無いと言った感じで落ちる裕哉

それでも、まだ笑わない

雄介「これでも食らえ」

俺は笑いながら泥を服に投げつける

裕哉「・・・やったね」

そう言いながら裕哉は泥を投げる

俺は雅紀を盾にして避ける

雅紀「よくもやったな」

俺は二人に対して泥を投げる

よく見ると裕哉も少し笑っている

俺達は泥だらけになりながらふざけあつた

結局、俺達の罠は失敗に終わったが、俺達の望みは叶えられ裕哉は笑った

その日から学園の生徒で笑わない者は居なくなった

雅紀「やっぱ、学校は楽しむものだろ？」

雄介「ああ」

裕哉「そうだね」

肩を組み笑いあう俺達

雄介「・・・言い忘れてた」

裕哉「ここ・・・学校じゃなくて学園・・・だよ？」
二人に突っ込まれると迫力が違う
雅紀「まあ細かい事は気にすんな」
この学園から笑顔が絶える事は無い
俺達がいる限り

（後書き）

スランプに陥り

尚且つ新しい事に挑戦した事によって定時公開に間に合わず

一週間ずれてしまいました^^；

と言っても設定は一週間前には出来ていて

書く気力が無くずれたと言うのが実際ですが・・・；

新しい事に挑戦するのは難しいですねゝ

とは言ってもいつも通りデイ・クォーター以内で書いてはいますが

w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6954t/>

笑顔が見たくて

2011年10月8日12時25分発行